

2022年2月6日
年間第五主日
菊地功大司教 メッセージ

「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」

ルカ福音は主イエスがシモン・ペトロにそう呼びかけて弟子とした、召命の物語を書き記します。「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と、プロの漁師としての経験知からイエスの求めに渋々応じたシモン・ペトロは、その後、生涯にわたって「お言葉ですから」と、弟子たちのリーダーとしてまた教会の頭としての務めを果たし続けることになります。神の呼びかけ、召命は、まさしく人知をはるかに超えた神秘の領域にあります。

パウロはコリントの教会への手紙で、自らが福音として伝えていることの核心部分をあらためて示します。それは、主イエスの受難と死と復活が、夢物語ではなく、現実の出来事であることを、改めて強調し、だからこそ神の恵みも絵空事ではなく現実であることを強調しています。

イザヤ書は、「誰を遣わすべきか」という神の問いかけに、イザヤが「わたしがここにおります」と応えた事を記しますが、その前段で、神による直接の罪の赦しが預言者を力づけたことを記しています。

わたしたちは、絵空事ではない事実に基づいて、わたしの力ではなく、呼んでくださった方の力によって、しかもその方による罪の赦しによって力づけられて、福音をあかしし、告げしらせるものであります。わたしたちは、主イエスの死と復活の証人です。

教会は2月5日に、日本26聖人殉教者を記念します。聖パウロ三木をはじめ26人のキリスト者は、1597年2月5日、長崎の西坂で主イエスの死と復活を証ししながら殉教して行かれました。

2019年11月に西坂を訪れた教皇フランシスコは、激しい雨の中、祈りを捧げた後に、次のように述べられました。

「しかしながら、この聖地は死についてよりも、いのちの勝利について語りかけます。ここで、迫害と剣に打ち勝った愛のうちに、福音の光が輝いたからです」

聖人たちの殉教は、死の勝利ではなく、いのちの勝利なのだ。聖人たちの殉教によって、福音の光が輝いた。そこから「福音の光」という希望が生み出されたと教皇様は指摘されました。

「殉教者の血は教会の種である」と、二世紀の教父テルトゥリアヌスは言葉を残しました。

教会は殉教者たちが流した血を礎として成り立っていますが、それは悲惨な死を嘆き悲しむためではなく、むしろ聖霊の勝利、すなわち神の計らいの現実の勝利を、世にある教会が証しし続けていくという意味においてであります。

わたしたちは、信仰の先達である殉教者たちに崇敬の祈りを捧げるとき、単に歴史に残る勇敢な者たちの偉業を振り返るだけではなく、その出来事から現代に生きるわたしたちへの希望の光を見いだそうとします。

わたしたちは信仰の先達である殉教者を顕彰するとき、殉教者の信仰における勇気に倣って、福音をあかしし、告げしらせるものになる決意を新たにしなければなりません。なぜならば、殉教者たちは単に勇気を示しただけではなく、福音のあかしとして、いのちを暴力的に奪われるときまで、信仰に生きて生き抜いたのです。つまりその生き抜いた姿を通じて、最後の最後まで、福音をあかしし、告げしらせたのです。

わたしたちは殉教者に倣い生き抜くようにと、今日、主から呼ばれています。